

畝傍陵墓監区事務所建替工事予定区域事前調査

はじめに

神武天皇畝傍山東北陵（以下、「当陵」）は、奈良県橿原市大久保町に所在する（第 1 図）。その陵域内には、主に奈良県の陵墓を所管する畝傍陵墓監区事務所があり、すでに建築から 80 年以上経過したことから、建替工事を計画することとなった。本報告は、将来に予定されている監区事務所建替工事に先立ち、工事予定区域を中心に遺構・遺物の有無を発掘により確認し、遺構の保護を前提とした適切な工法の検討に資することを目的として実施した事前調査にかんするものである。文責については章ごとに記した。

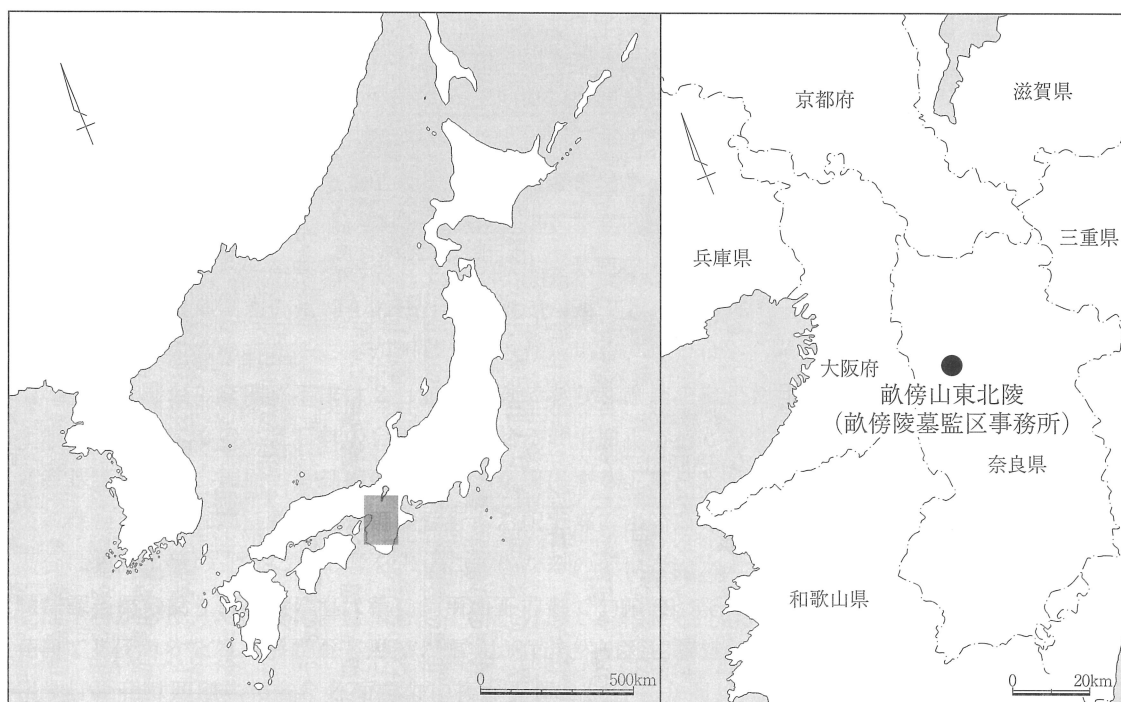
事前調査は、令和 4 年 11 月 14 日から 12 月 13 日まで実施し、陵墓管理委員による現地視察は 12 月 8 日、報道各社と 16 学協会への現地公開は 12 月 9 日におこなった。

（１）周辺の遺跡

当陵は、周知の埋蔵文化財包蔵地でいえば藤原京跡の内側に位置しており、条坊制の復元によると、調査地は六条大路付近である。当陵の北東には四条古墳群を含む四条遺跡、北西には弥生時代の環濠や水田、土器棺墓などが検出された慈明寺遺跡が広がっている。南西には遺物散布地として大久保遺跡があり、さらに南方には縄文時代の大規模集落、橿原遺跡が存在している（第 2 図）。また、当陵域内の御休所北側には、基壇状の地形に礎石が並び、その形状から塔跡とも考えられ、周辺に寺院跡が存在する可能性も以前より知られている。

（２）既往の調査

当陵では、昭和 52 年度に畝傍陵墓監区事務所水道管埋設工事の調査で、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦などが出土した⁽¹⁾。昭和 57 年の台風 10 号通過によって崩落した箇所は、平成 29 年に再び台風によって崩落した場所である（平成 30 年度の第 1 トレンチ）。平成 27 年度の調査では、昭和 52 年度調査時の III 層と平成 27 年度調査時の II 層が同じ土層の可能性を指摘した⁽²⁾。平成 30 年度の第 2 トレンチからは、佐倉川旧流路付け替え以前の洪水堆積層と考えられる砂礫層を検出した（第 3 図）⁽³⁾。（横田真吾）



第 1 図 畝傍山東北陵 概略位置図（1/25,000,000、1/2,000,000）

1. トレンチの設定と基本的な層序

(1) トレンチの設定

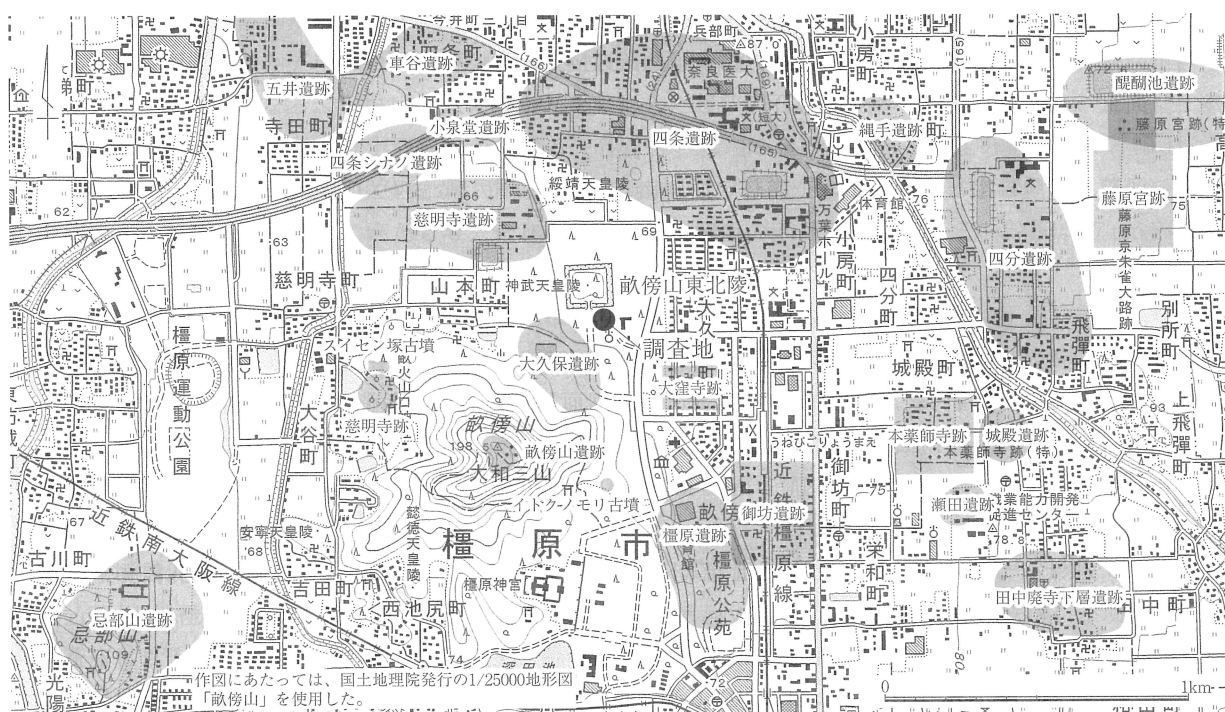
第1から第5トレンチまで、計5箇所設定した(第3図)。第1から第3トレンチは、畝傍陵墓監区事務所の北側、第4と第5トレンチは、畝傍陵墓監区事務所の南側である。前3者は監区事務所建替後の新事務所所隣接地に、後2者は監区事務所建替後の新ガレージ予定地である。本来であれば、前3者も新事務所予定地上に設定すべきであったが、新事務所予定地は現状の監区事務所と重なっているため、隣接地を調査することとなった。なお、本報告で使用する座標は、ITRF(国際地球基準座標系)に基づく世界測地系の平面直角座標第VI系を用い、地図中で方位記号の指し示す方角は座標北である。また、高さの基準面には東京湾平均海面(T.P.)を用いた。ただし、昭和63年(1988)測量の陵墓地形図(第3、10図)については上記と基準が異なる。

(2) 基本的な層序

第1から第5トレンチにおける基本層序は、表土(I)、現代造成土(II)、近代造成土(III)、近世水田層(IV)、中世遺物包含層(V)、洪水堆積層(VI)の順である。

そのうち、近代造成土(III)の上層(III-1)は、紀元二千六百年記念行事において、橿原神宮境域並びに畝傍山東北陵参道の拡張整備に伴う昭和13年から14年に造成された土層である。III-1層は人頭大の地山ブロック(シルト)を多く含み、造成作業では人力だけでなく、重機も使用されたと考えられる。また、III-1層は全てのトレンチで確認されたことから、当地での大規模な作業の様子を窺い知ることができる。

IV層を近世の水田跡と判断した根拠について、詳細は考察で述べるが、第2トレンチIV層断割より近世磁器片が出土していること、第2トレンチIV層上面観察により、均等に植えられた植物の痕跡が認められたことなどによる。なお、『文久山陵図』(図版8)⁽⁴⁾の当陵成功図には、陵南側に水田と思しき描写があり、水田は近代以降も続いた可能性があるが、大正13年測量の陵墓地形図では水田の存在した場所が平坦地となっている。ただし、第4と第5トレンチのIV層については、第1から第3トレンチのIV層より土色がやや褐色で異なり、埋められる直前は畑であった可能性も考えられるものの、主体となるのは灰色系の湿潤な場所の土壌である。



第2図 畝傍山東北陵 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

I層 表土。現地表面の土である。色調は灰黄褐色から黒褐色で、土粒子は細砂から粗砂である。

II層 現代造成土。現代の造成土である。色調は灰褐色から暗灰褐色で、土粒子は細砂から粗砂である。

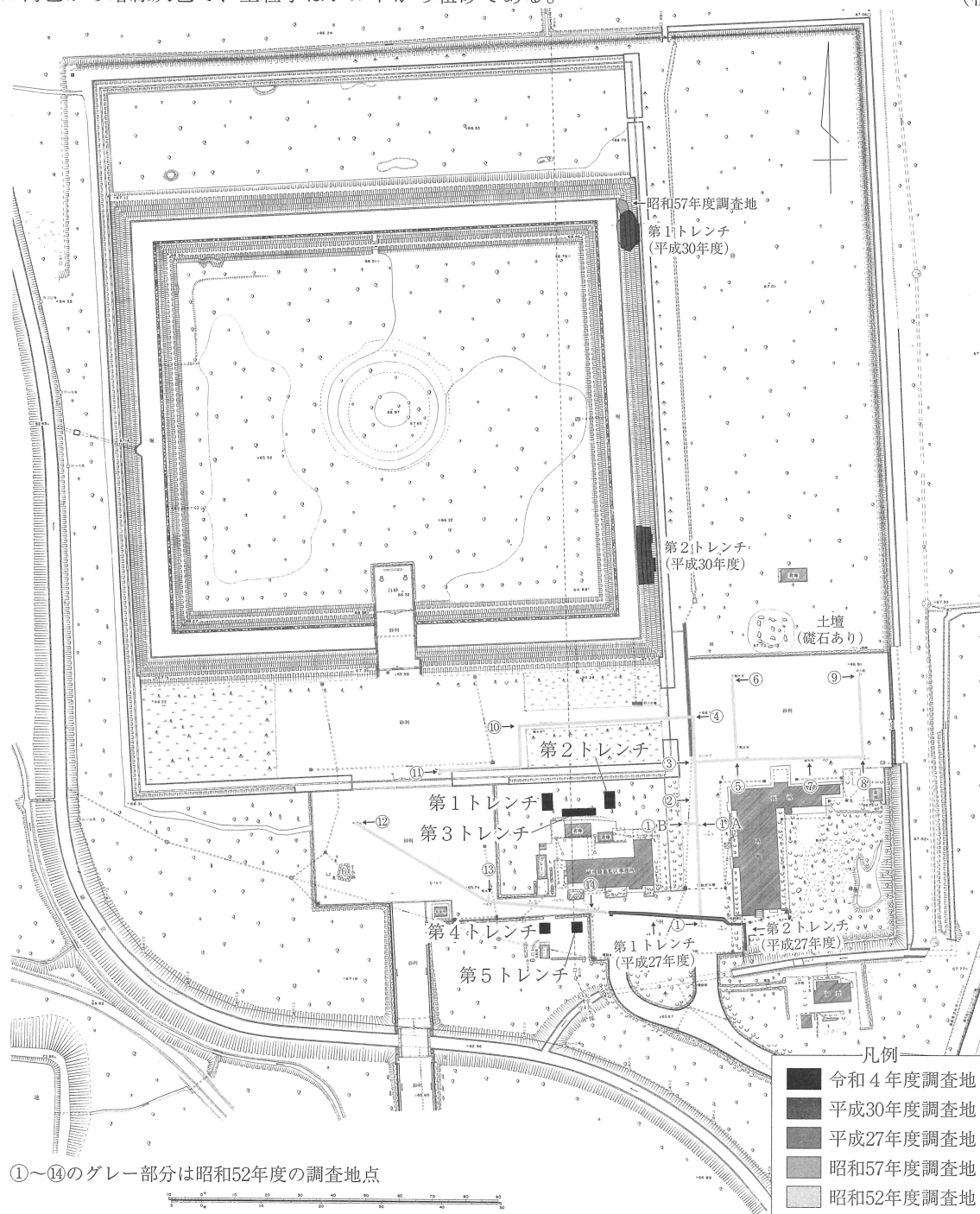
III層 近代造成土。陵整備時の造成土である。色調は黄褐色から黒褐色で、土粒子は細砂から粗砂である。

IV層 近世水田層。当陵の整備前から存在した水田土である。色調は褐色から灰黄色で、土粒子はシルトから細砂である。第4と第5トレンチで検出された畔もIV層に含めた。

V層 中世遺物包含層。第2トレンチの断割で確認した瓦器など中世の遺物を含む土である。色調は緑灰色から暗緑灰色で、土粒子はシルトから粗砂である。

VI層 洪水堆積層。中世以前の洪水による砂礫を主体とする堆積層である。遺物は検出されなかった。色調は褐色から暗緑灰色で、土粒子はシルトから粗砂である。

(横田)



第3図 畝傍山東北陵 調査地位置図 (1/2,000)

2. 各トレンチの状況

第1トレンチ（第4図左上、図版7） 監区事務所北側のトレンチ3箇所のうち、西に設定した長さ5m、幅3mのトレンチである。

土層の状況は、表土（I）、現代造成土（II）、近代造成土（III）、近世水田層（IV）が堆積している。トレンチ上部には紀元二千六百年記念行事の造成土（III-1）が、トレンチ下部には当陵の整備に伴う近代以降の造成土（III-2、3）があり、断割下部で近世の水田層（IV）上面を検出した。

遺構としては、断割下部で近世の水田を検出した。遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦が出土したが、いずれも近代以降の造成土に混入したもので、遺構に伴わない。

第2トレンチ（第4図右上、図版8・9） 監区事務所北側のトレンチ3箇所のうち、東に設定した長さ5m、幅3mのトレンチである。

土層の状況は、表土（I）、現代造成土（II）、近代造成土（III）、近世水田層（IV）、中世遺物包含層（V）、洪水堆積層（VI）が堆積している。トレンチ上部には紀元二千六百年記念行事の造成土（III-1）が、トレンチ下部には当陵の整備に伴う近代以降の造成土（III-5）があり、断割で近世の水田層（IV）、中世の遺物を含む遺物包含層（V）、佐倉川（桜川）旧流路以前の洪水堆積層（VI）を検出した。断割最下部で確認した洪水堆積層からは遺物が検出されず、標高64.2mより下に掘削すると湧水があるため、地山を確認することもできなかった。

遺構としては、近世の水田を検出した。トレンチの北側から南側へ近代造成土の落ち込みを検出したが、その性格は不明である。遺物としては、縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦、羽口が出土した。その多くは近代以降の造成土に混入し、遺構に伴わないものであるが、近世水田層より出土した磁器と遺物包含層より出土した瓦器は、土層の時期を考えるうえで重要である。

第3トレンチ（第4図下、図版10・11） 監区事務所北側のトレンチ3箇所のうち、中央に設定した長さ10m、幅2mのトレンチである。

土層の状況は、表土（I）、現代造成土（II）、近代造成土（III）、近世水田層（IV）が堆積している。トレンチ上部には紀元二千六百年記念行事の造成土（III-1）が、トレンチ下部には当陵の整備に伴う近代以降の造成土（III-2、3）があり、東西の断割下部で近世の水田層（IV）上面を検出した。水田層上面は、西断割よりも東断割の方が20cmほど高く、未掘部分に畦畔による段差がある可能性も考えられる。

遺構としては、断割下部で近世の水田を検出した。遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、埴輪、瓦、鉄器が出土したが、いずれも近代以降の造成土に混入したもので、遺構に伴わない。

第4トレンチ（第5図左、図版12） 監区事務所南側のトレンチ2箇所のうち、西に設定した長さ3m、幅3mのトレンチである。

土層の状況は、表土（I）、現代造成土（II）、近代造成土（III）、近世水田層（IV）が堆積している。トレンチ上部には紀元二千六百年記念行事の造成土（III-1）が、トレンチ下部には当陵の整備に伴う近代以降の造成土（III-2）があり、断割下部で畦畔を含む近世の水田層（IV）上面を検出した。

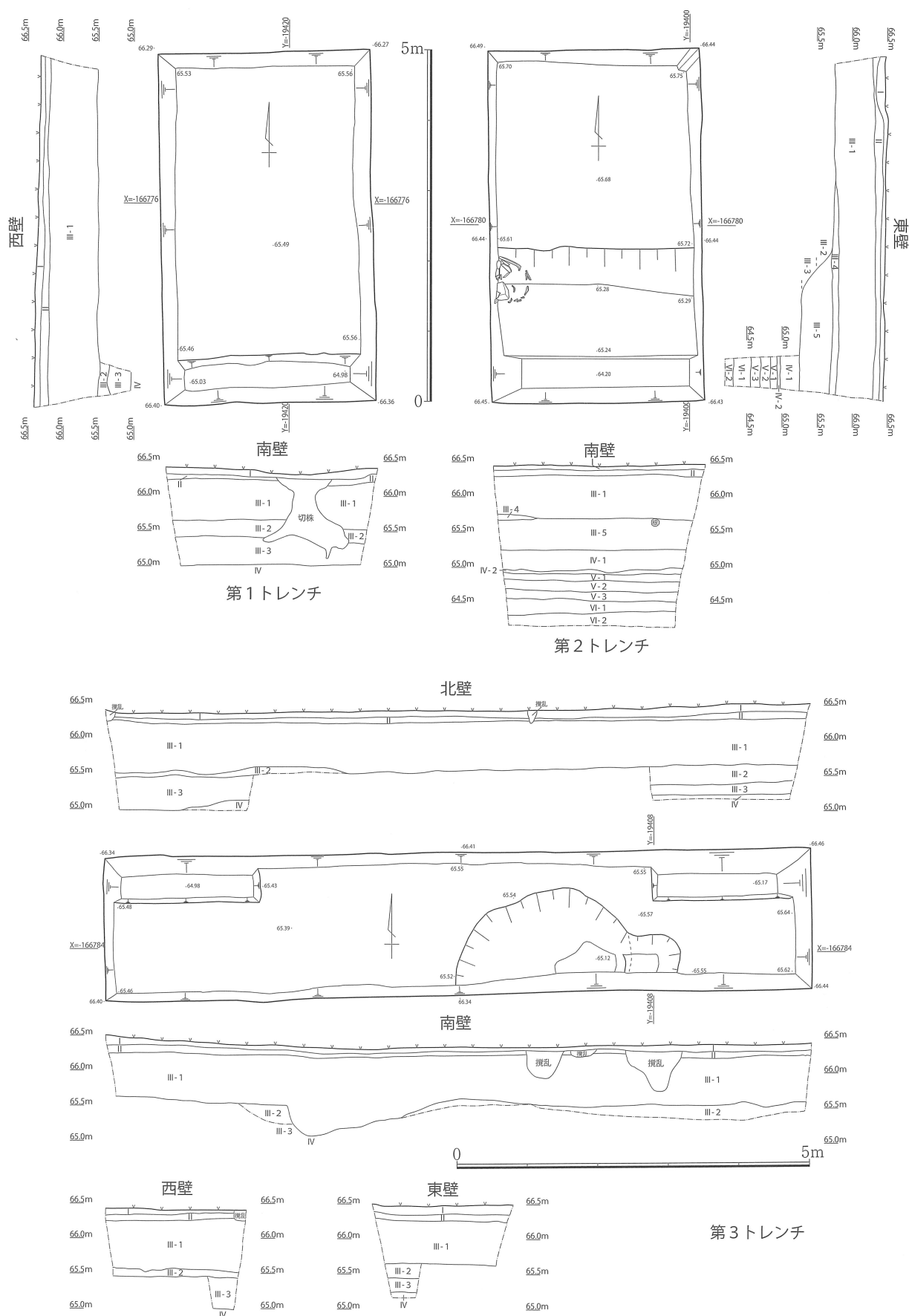
遺構としては、断割下部で近世の水田を検出した。遺物としては、弥生土器、土師器、陶器、磁器、鉄器が出土したが、いずれも近代以降の造成土に混入したもので、遺構に伴わない。

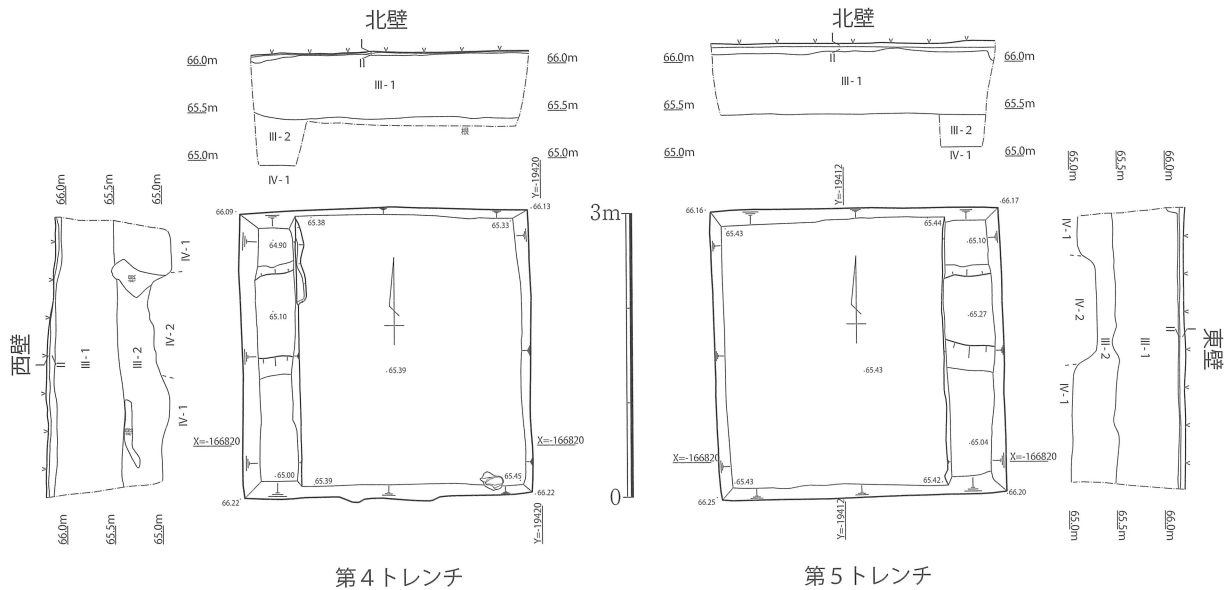
第5トレンチ（第5図右、図版13） 監区事務所南側のトレンチ2箇所のうち、東に設定した長さ3m、幅3mのトレンチである。

土層の状況は、表土（I）、現代造成土（II）、近代造成土（III）、近世水田層（IV）が堆積している。トレンチ上部には紀元二千六百年記念行事の造成土（III-1）が、トレンチ下部には当陵の整備に伴う近代以降の造成土（III-2）があり、断割下部で畦畔を含む近世の水田層（IV）上面を検出した。

遺構としては、断割下部で近世の水田を検出した。遺物としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、銭貨が出土したが、いずれも近代以降の造成土に混入したもので、遺構に伴わない。

（横田）





第5図 畝傍山東北陵 第4・5トレンチ平面図・断面図 (1/80)

3. 出土遺物

今回の調査における出土遺物は、414点（コンテナ1箱）であった。その内訳としては、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、羽口、瓦、石器、ガラス製のインク瓶、鉄器、銭貨などがあげられる。本節ではトレンチや層位ではなく、器種ごとに出土遺物を紹介する。

(1) 縄文土器 (第6図1～5、図版17-1)

1は第1トレンチII層から出土した残存高約11cmの深鉢片である。色調は外面が黒色、内面は茶褐色、断面は黄褐色で一部に橙黄色が見られ、焼成はやや不良である。胎土には径約3から4mmの礫を多く含む。

2は第3トレンチIII-1層から出土した残存高約3cmの鉢または壺の底部片で、色調は外面が褐色、内面は黒褐色で、焼成はやや不良である。胎土は粗く、径約5mmの砂礫を含んでいる。

3は第2トレンチIII-1層から出土した残存高約5cmの縄文土器片で、色調は内面が黒褐色、外面が橙色で、焼成はやや不良である。胎土には径約1から2mmの粒子を多く含む。小片のため、器種は不明である。

4は第5トレンチIII-2層から出土した残存高約5cmの口縁部から胴部にかけて残存する深鉢の口縁部破片である。口縁端部下位には突帯が1条確認できる。胎土は粗く、径約1から2mmの粒子を含む。色調は外面が黒褐色、内面が褐色で、焼成はやや不良である。

5は第5トレンチII層で出土した残存高約5.5cmの浅鉢の口縁部である。胎土は粗く、径約1から2mmの粒子を多く含む。色調は外面が褐色、内面が暗褐色で、焼成は不良である。浅鉢以外の可能性もある。

(2) 弥生土器 (第6図6～11、図版17-1)

6から8は第4トレンチIII-1層から出土した。6は残存高約6.5cmで、高坏又は器台の脚部片と考えられる。色調は内外面が橙色で、一部に黒斑が確認できる。焼成はやや不良である。胎土には径約1から2mmの粒子を含む。

7は残存高約7cmの壺口縁部片である。内面にはナデ調整により指頭圧痕が残り、外面調整にはケズリが施されている。一部に黒斑が確認できる。色調は内外面が黄褐色で、焼成はやや良好である。

8は残存高約5cmの甕破片と考えられる。色調は内外面が灰褐色で一部が黒色化しており、断面は黒褐色である。焼成は不良である。胎土は径約1から2mmの粒子を多く含む。

9は第3トレンチIII-1層から出土した残存高約3cmの壺の頸部・肩部周辺と考えられる。色調は内面が浅黄橙色、外面が橙色で、焼成はやや良好である。

10と11は第1トレンチIII-1層から出土した。10は残存高約12.5cm、復元脚部径約18cmの高坏脚部

片である。内面調整にはタタキやナデが施されており、一部では指頭圧痕が確認できる。外面調整にはミガキが施されている。脚端部にはヨコナデが施されている。色調は内外面が橙色で、焼成は良好である。

11は残存高約21cmの高坏脚部片である。内面調整にはナデが施され、指頭圧痕が残り、上位3分の1ではタタキ、脚端部ではヨコナデが施され、偶発的についた工具痕が確認できる。外面調整にはミガキが施され、工具痕が確認できる。断面には粘土紐の痕跡が残ることから、粘土紐の積み上げによって成形されたと考えられる。色調は内外面が橙色で、焼成は良好である。

(3) 土師器 (第6図 12~18、図版 17-2)

12から15は第3トレンチ III-1 層から出土した。12は残存高約2cm、底部径約3cmの高坏底部片である。脚部は欠損している。胎土には径約1から2mmの粒子を少し含んでいる。色調は内外面が橙色、断面が褐色で、焼成はやや良好である。

13は残存高約3cm、底部径約3cmの高坏底部片である。脚部は欠損している。胎土は粗い。色調は内外面が橙色、断面が褐色で、焼成はやや良好である。

14は残存高約6.5cmの高坏脚部片である。外面調整にはミガキが施されている。色調は内外面が橙色で、焼成はやや良好である。

15は残存高約6cmの高坏脚部片である。坏部の外面調整はナデとヘラケズリが施され、脚部の外面調整にはミガキが施されている。色調は内外面が橙色で、焼成はやや良好である。

16は第1トレンチ III-1 層から出土した残存高約6.5cmの小形丸底壺である。内面・外面ともに摩滅しており、調整は不明である。色調は内外面が橙色で、焼成はやや不良である。

17は第4トレンチ III-1 層から出土した残存高約4cm、復元口径約20cmの羽釜または焙烙（炮烙）の口縁部である。外面調整にはナデが施され、口縁部から下がった位置には鐏をめぐらせている。内面調整はナデが施されている。色調は内外面が橙色で、焼成は良好である。

18は第2トレンチ V-2 層から出土した残存高約1cm、高台部径約4.5cmの皿（かわらけ）である。外面調整は指ナデが施され、高台が貼り付けられている。内外面の色調は灰白色で、焼成はやや良好である。

(4) 須恵器 (第6図 19~24、第7図 25~29、図版 17-2)

19から22は第2トレンチ II 層から出土した。19は残存高約4.5cmの甕胴部片である。外面調整には横方向の平行タタキが施され、一部に自然釉が付着している。内面調整には指ナデが施されている。色調は内外面、断面が灰色で、焼成は良好である。胎土には径約1から2mmの粒子がわずかに含まれる。

20は残存高約5cmの甕胴部片である。外面調整には横方向の平行タタキが施されている。色調は内外面が黒褐色、断面が暗赤褐色で、焼成は良好である。

21は残存高約4cmの器種不明の底部片である。内面調整には回転ナデが施されている。外面調整には回転ヘラケズリが施されている。色調は内外面が灰色で、焼成は良好である。

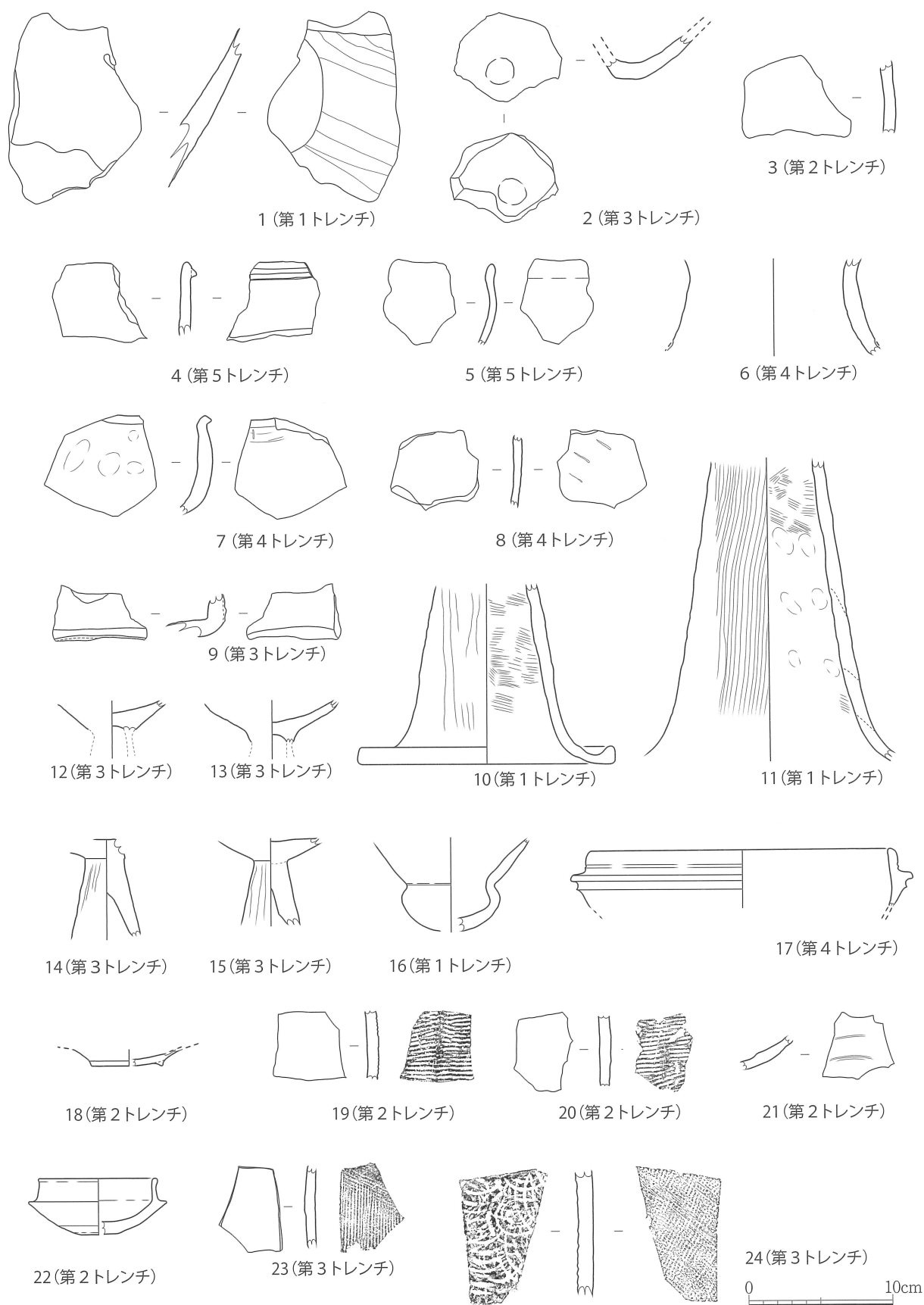
22は残存高約4cm、復元受部径約9.5cm、復元口縁部径約8cmの坏身である。口縁部から胴部を中心に全体の1割ほどが残る。内面調整には回転ナデが施され、外面調整は一部がコケの影響で不明瞭であるが、回転ヘラケズリと回転ナデが認められる。胎土に含まれる砂粒の移動方向から、ロクロ回転は反時計回りと考えられる。色調は内外面が灰色で、焼成は良好である。

23から27は第3トレンチ III-1 層から出土した。23は残存高約6cmの甕胴部片である。色調は内面が暗灰色、外面が灰色、断面が青灰色で、焼成は良好である。外面調整にはヘラケズリのち縦方向の平行タタキが施され、内面調整にはナデが施されている。

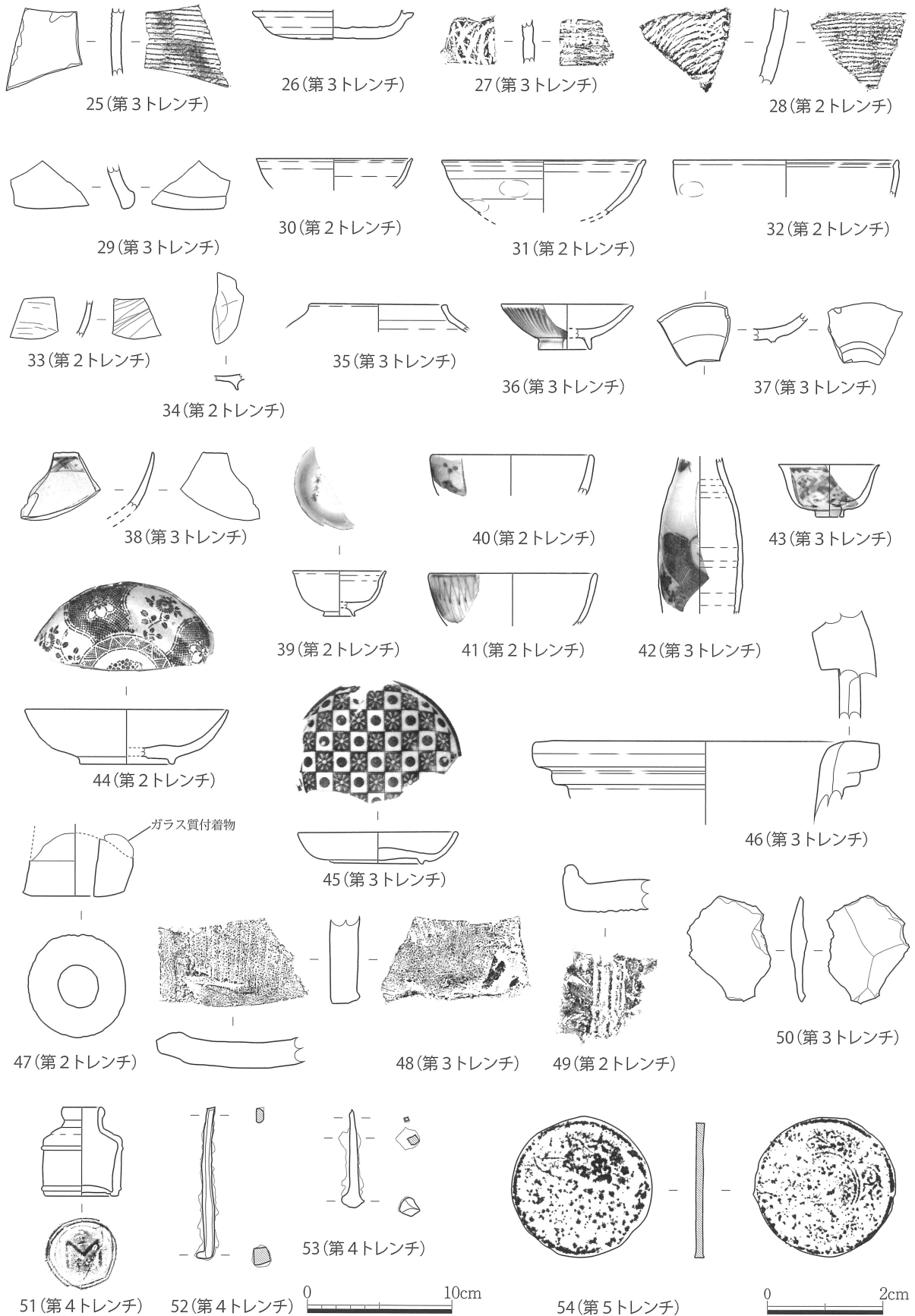
24は残存高約9cmの甕胴部片である。外面調整には格子状のタタキが施され、内面には同心円状の当具痕が確認できる。色調は内外面が暗灰色、断面が灰色で、焼成は良好である。

25は残存高約4.5cmの甕胴部片である。外面調整には横方向の平行タタキのちナデが施され、内面調整にはナデが施されている。色調は内面が青灰色、外面が暗青灰色、断面が赤褐色で焼成は良好である。

26は残存高約2cm、復元受部径約11cmの坏身である。全体の約2割が残存する。内面調整には回転ナ



第6図 畝傍山東北陵 出土品実測図(1)(1/4)



土器・陶磁器・羽口・瓦・石器・ガラス瓶・鉄釘 (1/4) 銭貨 (1/1)
第7図 畝傍山東北陵 出土品実測図 (2) (1/4、1/1)

デが施され、外面調整として胴部下位4分の1は回転ヘラケズリ、上位4分の3は回転ナデが施されている。胎土に含まれる砂粒の移動方向から、ロクロ回転は反時計回りと考えられる。色調は内面が青灰色、外面は暗青灰色、断面は黒褐色で、焼成は良好である。

27は残存高約1cmの甕胴部片である。外面調整には平行タタキが施され、内面には同心円状の当具痕が確認できる。色調は内外面が青灰色、断面が灰白色で、焼成は良好である。

28は第2トレンチV-1層から出土した残存高約5.5cmの甕胴部片である。内面には同心円状の当具痕が確認でき、外面調整には横方向の平行タタキが認められる。色調は外面が暗青灰色、内面と断面が青灰色で、焼成は良好である。胎土には径約1から2mmの粒子がわずかに含まれている。

29は第3トレンチIII-2層出土の残存高約3cmの高坏脚部である。内外面調整は回転ナデが施されている。色調は内外面が灰色で、焼成は良好である。

(5) 瓦器 (第7図30～34、図版18-2)

30は第2トレンチIV-2層から出土した残存高約2cm、復元口径約10.5cmの瓦器椀口縁部片である。内面調整にはヘラミガキのち横方向のナデが施され、外面調整にはヘラミガキとナデが施されている。口縁端部はわずかに外反し、1条の沈線が施されている。色調は内外面が黒色、断面が灰色で、焼成は良好である。形状から、大和型瓦器椀と考えられる。

31と32は第2トレンチV-2層から出土した。31は残存高約3.5cm、復元口縁部径約14cmの瓦器椀片である。口縁部から胴部を中心に全体の約1割が残存する。内外面調整には横方向のナデが施され、外面には指頭圧痕が残る。口縁端部はわずかに外反し、1条の沈線が施されている。色調は内外面が黒色で、断面は灰色、焼成は良好である。形状から、大和型瓦器椀と考えられる。

32は残存高約2.5cm、復元口縁部径約15.5cmの瓦器椀口縁部である。外面には横方向のナデが施され、指頭圧痕が残る。口縁端部はわずかに外反し、1条の沈線が施されている。色調は内外面が黒色で、断面は灰色、焼成は良好である。形状から、大和型瓦器椀と考えられる。

33は第2トレンチV-3層から出土した残存高約3cmの瓦器椀片である。内面調整はヘラミガキが施され、外面調整はナデが施されている。色調は内外面が黒色、断面は灰色と灰白色で、焼成は良好である。

34は第2トレンチV-2層から出土した残存高約1cm、復元高台部径約6cmの瓦器椀底部である。色調は内外面が黒色で、断面は灰色、焼成は良好である。

(6) 陶磁器 (第7図35～47、図版18-1)

35は第3トレンチII層から出土した残存高約2cm、復元口径約9.5cmの陶器口縁部片(土瓶か)である。内外面は施釉されているが、口縁部では釉が施されていない。色調は内外面が暗褐色、断面は黄褐色で、焼成は良好である。

36から38は第3トレンチIII-1層から出土した。36は器高約3cm、復元口径約9cmの近代磁器椀である。内外面に染付の後、透明釉が施されている。高台を中心に一部では厚く施釉されている。

37は残存高約2cmの近代磁器椀片である。内外面には透明釉が施されているが、内面の底部は露胎している。

38は残存高約4.5cmの近世磁器椀口縁部片である。内外面には釉が施されている。

39は第2トレンチIII-1層から出土した器高約3cm、復元口径約6.5cmの磁器椀である。全体の約4割が残存する。内面の底には「峯定宿」の文字が釉の上に描かれている。また、白色で「徳」の文字も確認できる。内外面に透明釉が施されている。

40と41は第2トレンチIII-3層から出土した。40は残存高約3cm、復元口径約11.5cmの近世磁器椀口縁部片である。内面は透明釉が施され、外面は染付の後、透明釉が施されている。

41は残存高約3.5cm、復元口径約11.5cmの近世磁器椀口縁部片である。内面は透明釉が施され、外面は染付の後、透明釉が施されている。

42と43は第3トレンチIII-3層から出土した。42は残存高約11.5cmの徳利の胴部片である。反転復元に

よる胴部最大径は約 6.5 cm である。内面調整は透明釉が施され、外面は染付の後、透明釉が施されている。

43 は器高 3.5 cm、復元口径約 6.5 cm の近代磁器碗である。内面は透明釉が施され、外面は染付の後、透明釉が施されている。

44 は第 2 トレンチ III-1 層から出土した残存高約 3.5 cm、復元口径約 14 cm の近代磁器皿である。全体の約 4 割が残存する。外面の底部には糸切痕が確認できる。内外面ともに染付の後、透明釉が施されている。外面底部は釉が施されていない。

45 と 46 は第 3 トレンチ III-1 層から出土した。45 は残存高約 2.5 cm、口径約 11 cm の印はん手の皿である。全体の約 7 割が残存する。内面は染付の後、透明釉が施されている。内面の図柄は市松模様状に日章旗と旭日旗が描かれている。外面にも透明釉が施されているが、図柄はない。高台の一部では厚く施釉されている。印はん手は、型紙や印判などで同一の文様を施す手法である。

46 は残存高約 6 cm、復元口径約 24 cm の陶器の口縁部片である。破片のため器種は不明だが、構造などから火鉢や七輪といった火の使用に関連した器具と考えられる。内面調整にはナデが施され、外面調整にはケズリが施されている。色調は内面が暗赤褐色、外面が橙色で、焼成は良好である。

47 は第 2 トレンチ III-1 層から出土した残存高約 4.5 cm、直径約 6.5 cm の鞆の羽口である。中心に直径約 2.5 cm の送風孔が空いている。厚さは約 2 cm である。色調は内外面が明褐色で、焼成はやや良好である。胎土には径約 2 から 3 mm の礫を少し含んでいる。また、破損した箇所にはガラス質の付着物が確認できる。

(7) 瓦 (第 7 図 48・49、図版 18-3)

48 は第 3 トレンチ III-1 層から出土した平瓦片である。厚さ約 2 cm、残存長約 6 cm、幅約 10.5 cm である。凹面の調整には布目痕とヘラケズリが確認できる。凸面の調整にはナデが施されている。端部調整はケズリによって面取がなされている。色調は内外面が青灰色、断面が灰色で、焼成は良好である。

49 は第 2 トレンチ II 層から出土した軒平瓦片である。厚さは最大約 3 cm、残存長約 6 cm、幅約 7 cm である。凸面にはタタキ痕が残る。色調は灰色、黄褐色で、焼成は良好である。

(8) 石器 (第 7 図 50、図版 18-3)

第 3 トレンチ III-1 層から出土したサヌカイト製の打製石器である。最大長は約 7.5 cm、最大幅は約 5.5 cm、厚さは約 1 cm である。

(9) ガラス製品 (第 7 図 51、図版 18-3)

第 4 トレンチ III-1 層から出土した高さ約 6 cm、口径約 2.5 cm、底部径約 5 cm のガラス製のインク瓶である。全体の約 9 割が残存する。瓶は無色透明で、底部には「M」の陽刻（エンボス）が確認できる。陽刻から、丸善製のアテナインキのインク瓶とわかる。

(10) 金属器 (第 7 図 52～54、図版 18-3)

52 と 53 は第 4 トレンチ III-1 層から出土した鉄製の和釘である。52 は残存長約 10.5 cm、頭部の最大厚約 1.5 cm、胴部の最大厚約 1 cm で、錆が多く付着しており不明瞭であるが、下端は欠損していると思われる。53 は長さ約 6.5 cm、頭部の最大厚約 1.5 cm、胴部の最大厚約 1 cm で、錆が多く付着している。

54 は第 5 トレンチ III-1 層から出土した径約 2.5 cm、厚さ約 0.15 cm の青銅貨である。表面は、縁辺部に粒状の突起、唐草、十花卉の菊文が確認できる。大部分は錆に覆われているが、中央部には二重の円と、その内側に「銭」の字が確認できる。裏面は、五七桐と桜の花の模様、「大日本」の字が確認でき、縁辺部には表面と同様に粒状の突起が施されている。裏面も大部分は錆に覆われており、記年は不明である。色調は緑灰色である。

図柄や大きさなどより、大正 5 年から昭和 13 年の間に発行された桐 1 銭青銅貨と考えられる。なお、表裏の図案が同じ貨幣としては、大正 5 から 8 年に発行された 5 厘青銅貨がある⁽⁵⁾。

(田中詢弥)

4. 考 察

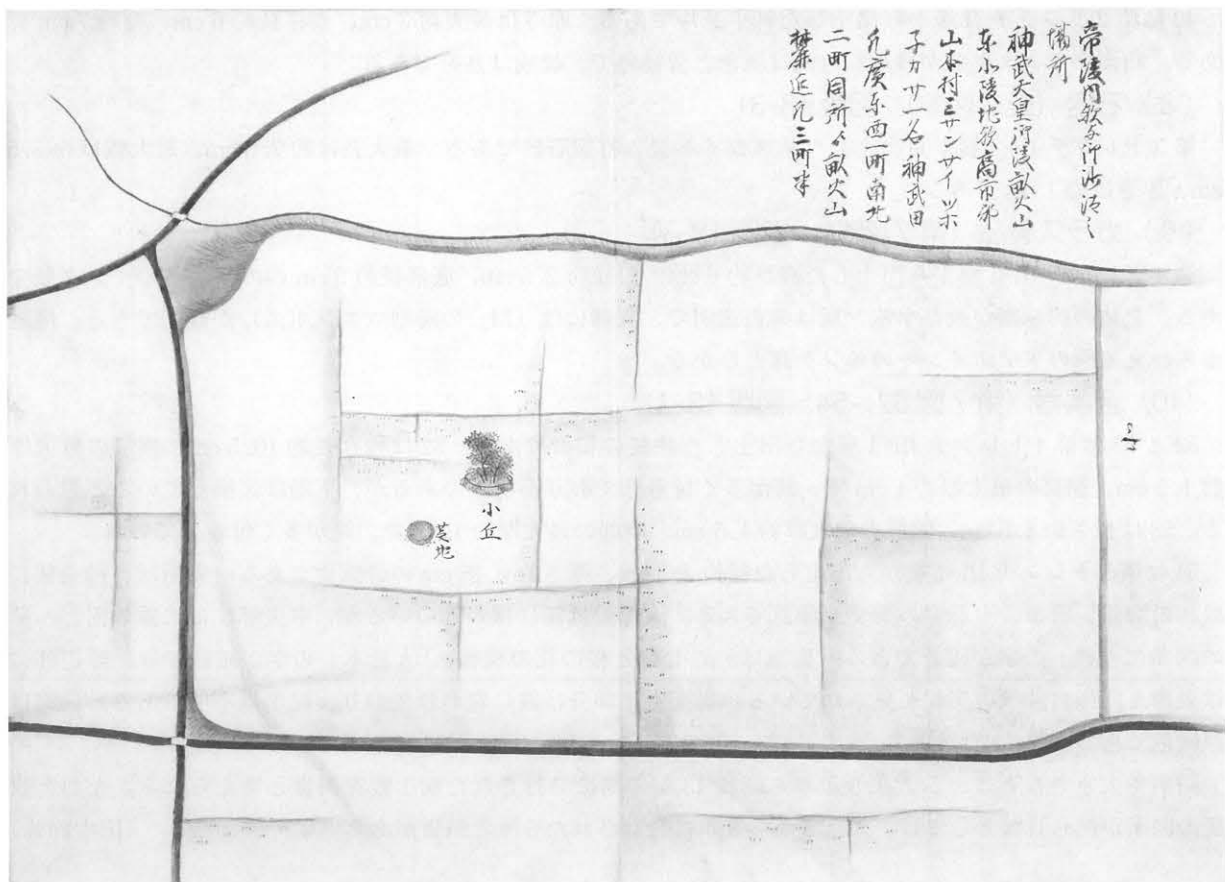
(1) 地山の位置

令和4年度の事前調査では、いずれのトレンチでも地山は確認できなかった。最も深く掘削した第2トレンチ断割の底は標高64.2mで、標高66.5mの地表面より2.3m下である。昭和52年度の立会調査では、北東側の第6から第9地点において、地表面より数cmから数十cmの浅いところで地山と思しき土を確認した。その報告では「本来の自然地形は、現地形以上に北東部が高く、南西部が低かったものと思われ、南の第1地点と西の第12地点では、掘削床面までに地山に対応する地層は見出されず、地山はさらに深部にあるものと予測される」としている⁽⁶⁾。今回と過去の調査結果を照らし合わせると、昭和52年度調査報告で予測された通り、地山からみた陵墓地内の自然地形は、北東側（御休所北側）が高く、南西側（監区事務所側）が低くなっていることは明らかである。

(2) 流路の位置

『山陵絵図』 また、昭和52年度第9地点で検出された河原ないし川床と思しき土層が南東から北西に伸びていること、第6から第9地点の浅い場所で地山と思しき土を検出していることから、流路があった場合、第9地点の南側を東西方向に流れていた可能性がある。この流路が幕末の修陵で佐倉川（桜川）付け替えがおこなわれる直前のものか、それとは別流路か詳細は不明であるが、幕末の『山陵絵図』（第8図）⁽⁷⁾には、小丘を中心とした東西1町、南北2町の土地南辺に沿って東西流路が描かれており、これに該当する可能性も考えられる。この東西流路はその流れる方向より、昭和52年度第6地点北東にある土壇の南方向を流れていたと考えられるが、流路と土壇の関係については、土壇周辺を広く調査した際に明らかとなるだろう。

『聖蹟図志』 他の絵図では、平塚瓢斎著『陵墓一隅抄』の付図である『聖蹟図志』の「畝傍山北面」図（第9図）⁽⁸⁾をみると、神武田に旧塚と新塚という2つの塚があり、そのすぐ南には北西方向に川が流れて



第8図 畝傍山東北陵 『山陵絵図』（図書寮文庫所蔵）

いる。この2つの塚は『文久山陵図』に描かれた神武天皇陵、川は修陵前の佐倉川と考えられることから、流路変更がおこなわれる前の佐倉川の位置を知る上で、「畝傍山北面」図もまた重要である。

『神武天皇御陵縄引絵図』 詳細な絵図では、『神武天皇御陵縄引絵図』(第11図、図版15)⁽⁹⁾に当陵修陵以前の地割が描かれていて、田や畑など具体的な土地の利用状況を知ることができる。そこには、字名・面積・石高・年貢・地主のほか、幕末の付け替え以前の佐倉川の具体的な位置も描かれ、現在ある濠の南西角付近を南東から北西へと流れている。文久の修陵により、佐倉川は現濠よりも南側に付け替えられ、その後、紀元二千六百年記念行事における事業によって、当陵周辺が整備されるに伴い、さらに南側の現在の位置へと川筋が定まったのである。また、図中にある東西の直線流路は、上述の『山陵絵図』にも描かれている。

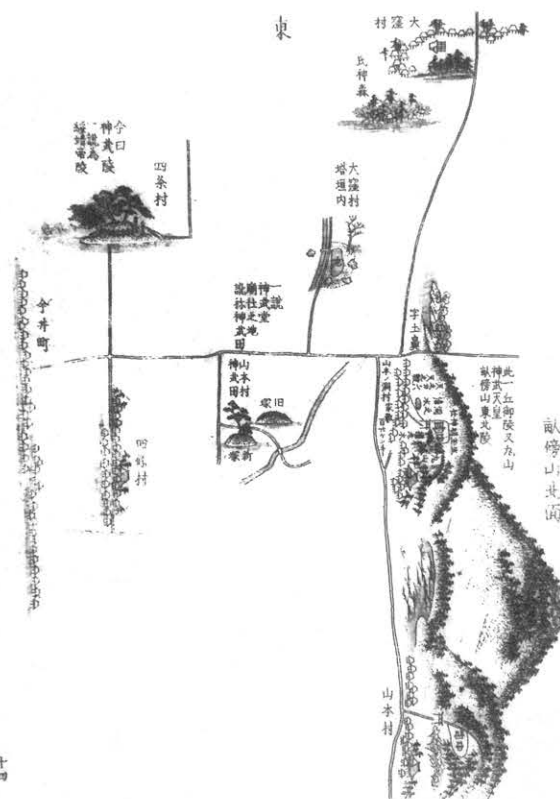
流路の方向 そのほか、後藤秀穂著『皇陵史稿』に掲載された「神武田」図⁽¹⁰⁾でも、『神武天皇御陵縄引絵図』（以下、『縄引絵図』）で描かれた位置に畑や東西流路があり、それぞれの図を比較しても佐倉川や流路の位置に矛盾はない。これらの絵図によれば、幕末の佐倉川旧流路は現在の濠南西角付近を南東から北西方向に、東西流路は現在の濠南辺付近を東から西方向

その他流路 なお、中世の遺物包含層下で検出された令和4年度第2トレンチの洪水堆積層や平成30年度第2トレンチの洪水堆積層は、上述の幕末に存在した流路の作用によるものではないことは、絵図や層位の検討から明らかで、より古い時代にあった川（仮称、「旧佐倉川」）の作用によるものと考えられる。地山からみた陵墓地内の自然地形は、北東側（御休所北側）が高く、南西側（監区事務所側）が低くなっていることは先述の通りである。この低い部分を旧佐倉川が流れていたとすると、修陵による付け替え前の佐倉川よりも北東側、平成30年度第2トレンチ西側を流れていた可能性がある。

(3) 調査の位置

絵図の検討により、当陵修陵以前の概況を知ることができたが、具体的に絵図のどの場所が調査地なのかは判然としない。そのため、具体的な面積などが記された『縄引絵図』によって、調査地の位置について検討したい（第11図、第1表）。計算に使った面積の単位は1町約9,900 m²、1反約990 m²、1畝約99 m²、1歩約3.3 m²、距離の単位は1町約109 m、1間約1.82 mである。歩よりも下の単位については、計算で省略した。

赤い点線の面積　まず、この絵図の見方として、赤い点線で囲まれた範囲は、修陵で惣域（『神武天皇
畝火山東北陵修埋図』（図版 16）⁽¹¹⁾）により東西 1 町 26 間、南北 2 町、面積約 34,077.76 m²）とされた土居に
囲まれた領域に該当すると考えられる。その理由としては、赤い点線の範囲を『縄引絵図』で計算すると約
28964.1 m² となり、実際の面積よりも狭くなる「縄伸び」がどの程度考慮されたかは不明であるが、絵図
に記載がない道や川の面積なども含めると、惣域に近い数字になると推定可能であること、『縄引絵図』の
赤い点線の南東に「御陵守小屋地所」との記載があり、『文久山陵図』の惣域南東に描かれた小屋の位置が
同じであることが挙げられる。なお、『縄引絵図』で赤い点線にかかった御陵地と内訳面積記載のある土地
については、赤い点線の範囲内をその土地における当陵の惣域として面積を計算した。御陵地内訳ではな

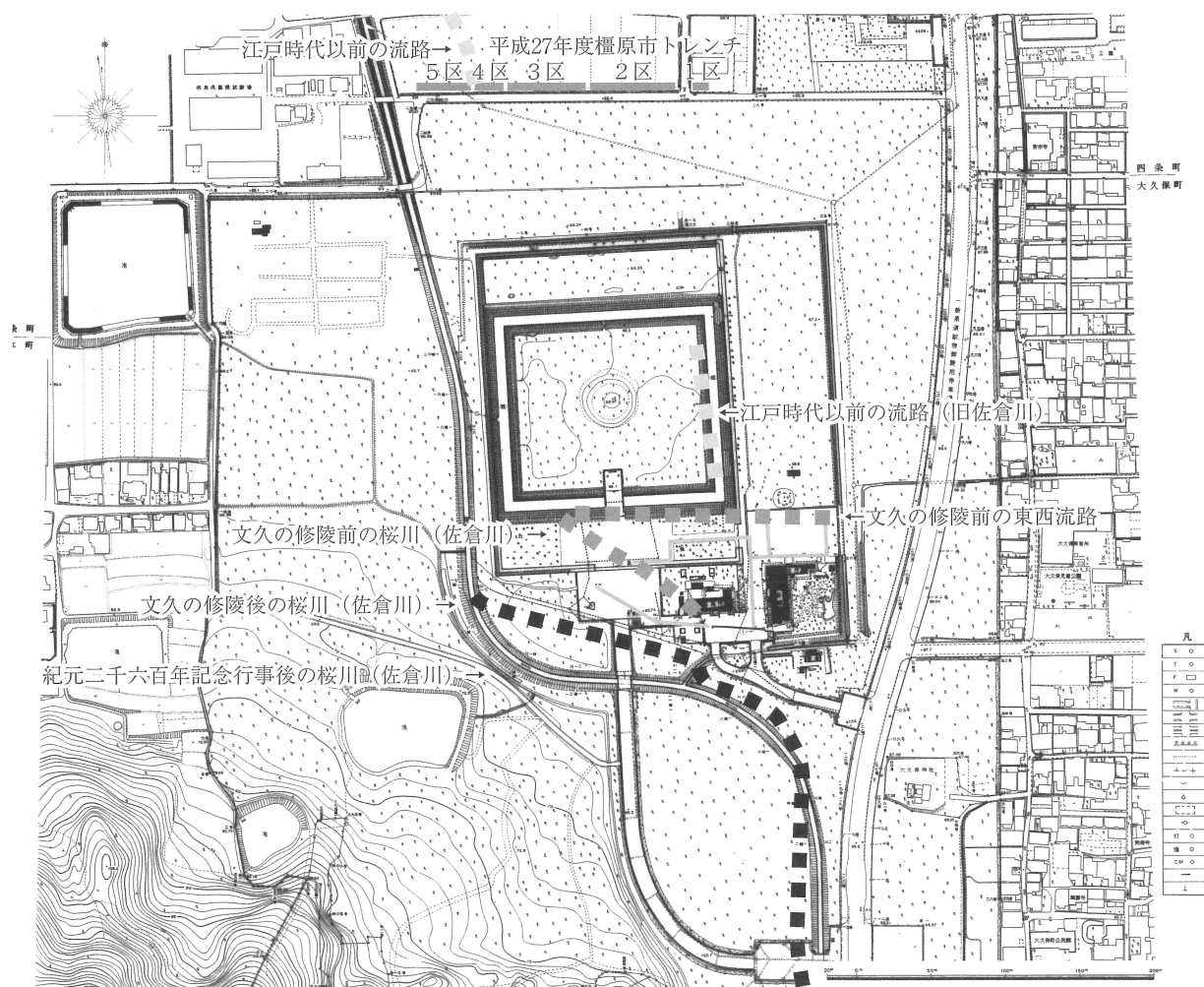


第9図 畝傍山東北陵
『聖蹟図志』(宮内公文書館所蔵)

く、赤い点線のかかる土地全体の面積で計算すると約 32,643.6 m² となり、道や川などを含めた場合、惣域の面積を超過する可能性がある。

東西一町南北二町 修陵前の当陵周辺は、『延喜式』に東西一町南北二町と記された兆域とほぼ同じ矩形の土地であったことが知られるが、その小高い地形より該当すると考えられる第11図8から28までの面積は約 13,731.3 m² で、「縄伸び」を考慮しても、東西一町南北二町の面積約 23,762 m² とは大差があるため、そのまま使われていないことは明らかである。当陵周辺の地割では、西方に東西一町南北二町の区画があり、その南端と合わせて当陵に東西一町南北二町の区画を当てはめると、惣域北側まで領域が出ることから、元の地形はそこまで及んでいたと考えられる。修陵前の地形、東西一町南北二町をそのまま使わなかったのは、高まりの部分が南に寄っていたために、そこを中心とした南北二町の形状に整える意図があったのではないかと思料する。

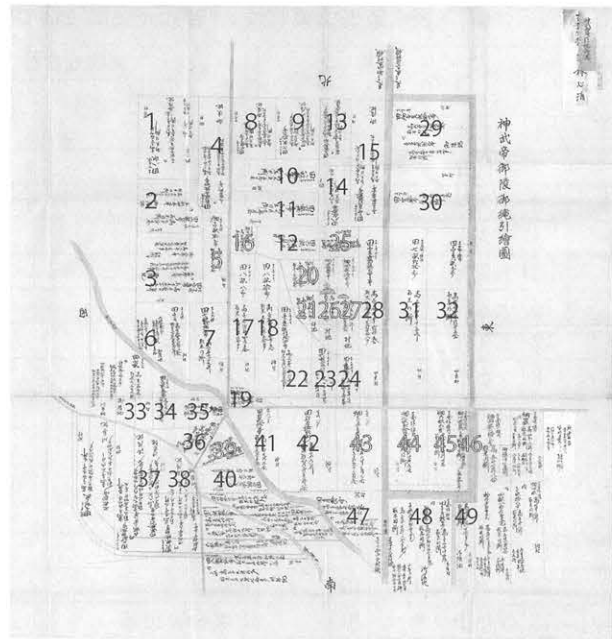
「縄伸び」の状況 「縄伸び」が実際のどの程度あったのか検討すると、その地割から1町四方（面積約 11,881 m²）と考えられる第11図12と16から28を足すと約 8,573.4 m² で、1町四方の面積とは 3,307.6 m² も異なる。また、惣域の東西長1町26間（約 156.32 m）から中心の1町（約 109 m）を引いた26間（約 47.32 m）が、第12図1、4、31、32の東西長を足したおおよその長さであり、これを東と西のため2で割ると13間（約 23.66 m）となる。31と32を足した面積約 2,359.5 m² を東西長約 23.66 m で割ると、南北長が約 100 m となり、南北が本来の1町よりも9 m ほど短かったように見えてしまうが、実際には南北1町（約 109 m）、東西13間（約 23.66 m）で、面積約 2,578.94 m² だったものが、「縄伸び」などを経て減少したものと考えられる。



第10図 畝傍山東北陵 旧流路推定位置図 (1/5,000)

調査地の位置推定 上記により、『縄引絵図』の赤い点線の範囲は、修陵時の土居で囲まれた惣域に該当すること、修陵では修陵前の東西一町南北二町の地形をそのまま使うのではなく、高まりを中心とした整備がなされたことが明らかになった。以上の情報から調査地の位置を考えると、調査地は現在まで残る土居よりも南側に位置することから、赤い点線より南側であり、惣域外の東側半分のうちに収まる。赤い点線より南側で、惣域外東側に該当する土地は、『縄引絵図』でみると第11図の47から49であるが、このうち49は東端でわずかにかかるのみであるため、これを除外すると、47か48となる。47と48はいずれも田であり、調査で検出した近世水田層がこれに該当すると考えて大過ないだろう。

(横田)



第11図 畝傍山東北陵 『神武天皇御陵縄引絵図』
(宮内公文書館所蔵、数字は筆者加筆、白抜きは畑地、個人名は筆者が削除)

まとめ

事前調査では、工事予定区域周辺における土層の堆積状況を確認することができた。遺構としては、近代の造成土下に近世の水田を検出し、当該地が造成土で厚く覆われた状況を確認した。ただし、事前調査では地山を検出しておらず、中世の遺物包含層下の古代以前の状況は不明である。遺物としては、縄文時代から近代までの遺物が造成土に多く含まれていることから、周辺に古代以前の遺構があったことは推定できるが、原位置を保ったものではないことに留意したい。事務所建替工事の詳細については、事前調査成果をふまえた工法検討と工事設計を経て決定していく予定である。

(横田・田中)

註

- (1) 笠野 毅「畝傍陵墓監区事務所水道管埋設工事箇所の調査」『書陵部紀要』第30号、宮内庁書陵部、1979年。
- (2) 横田真吾「神武天皇 畝傍山東北陵御休所修繕工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第68号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2017年。
- (3) 横田真吾「神武天皇 畝傍山東北陵外堤法面復旧工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第71号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2020年。
- (4) 「神武天皇陵 荒蕪」慶応4年写『文久山陵図』写(宮内公文書館所蔵、識別番号:42079-4)
「神武天皇陵 成功」慶応4年写『文久山陵図』写(宮内公文書館所蔵、識別番号:42079-3)
- (5) 郡司勇夫編『日本貨幣図鑑』、東洋経済新聞社、1981年。
- (6) 註(1)に同じ。
- (7) 『山陵絵図』(図書寮文庫所蔵、函架番号:265-138)
- (8) 『聖蹟図志』上・下(宮内公文書館所蔵、識別番号:42128)
- (9) 『神武天皇御陵縄引絵図』(宮内公文書館所蔵、識別番号:41710)
- (10) 後藤秀穂『皇陵史稿』、1913年。
- (11) 『神武天皇畝火山東北陵修理図』(宮内公文書館所蔵、識別番号:41706)

第1表 畝傍山東北陵 『神武天皇御陵縄引絵図』の地割と面積（番号は第11図と対応）

番号	字名	種別	御陵地含む		御陵地のみ		地主在村
			面積	面積 (㎡)	面積	面積 (㎡)	
1	下久保	田	8 畝	792	1 畝 21 歩	168.3	四条
2	下久保	田	6 畝 2 歩	600.6	5 畝 4 歩 7 厘	508.2	四条
3	下久保	田	1 反 4 歩	1003.2	7 畝 13 歩 7 厘	735.9	洞
4	下久保	田	2 畝 24 歩	277.2	1 畝 28 歩	191.4	洞
5	下久保	畑	1 畝 15 歩	148.5			洞
6	上久保	田	1 反	990	6 畝 28 歩	686.4	洞
7	上久保	田	7 畝 28 歩	785.4			洞
8	ツホ子カサ	田	7 畝 3 歩	702.9	5 畝 11 歩 1 厘	531.3	四条
9	ツホ子カサ	田	6 畝 12 歩	633.6	4 畝 26 歩 1 厘	481.8	四条
10	ツホ子カサ	田	8 畝 20 歩	858			洞
11	ツホ子カサ	田	6 畝 13 歩	636.9			四条
12	ツホ子カサ	田	6 畝	594			四条
13	(無記)	田	5 畝 18 歩	554.4	4 畝 8 歩 4 厘	422.4	四条
14	ツホ子カサ	田	8 畝 10 歩	825			洞
15	ツホ子カサ	田	1 反 6 畝 10 歩	1617	1 反 4 畝 5 歩 4 厘	1402.5	洞
16	ミサンサイ	畑	1 畝 6 歩	118.8			大久保
17	ミサンサイ	田	8 畝 8 歩	818.4			洞
18	ミサンサイ	田	8 畝 10 歩	825			洞
19	ミサンサイ	田	10 歩	33			洞
20	ミサンサイ	畑	3 畝 18 歩	356.4			(村地)
21	ミサンサイ	畑	3 畝 3 歩	306.9			(村地)
22	ミサンサイ	田	1 反 7 畝 24 歩	1762.2			洞
23	ミサンサイ	田	6 畝 28 歩	686.4			洞
24	ミサンサイ	田	3 畝 12 歩	336.6			洞
25	ミサンサイ	畑	3 畝 3 歩	306.9			大久保
26	ミサンサイ	畑	4 畝 12 歩	435.6			(村地)
27	ミサンサイ	畑	4 畝 12 歩	435.6			(村地)
28	ミサンサイ	田	1 反 5 畝 22 歩 5 厘	1557.6			四条
29	下座	田	1 反 6 畝 17 歩	1640.1	1 反 1 畝 8 歩 2 厘	1115.4	洞
30	下座	田	1 反 10 歩	1023			四条
31	北塔ノ垣内	田	7 畝 22 歩	759			洞
32	北塔ノ垣内	田	1 反 6 畝 5 歩	1600.5			四条
33	東ツエ	田	7 畝	693	2 畝 13 歩 5 厘	240.9	洞
34	東ツエ	田	1 畝 24 歩	178.2			洞
35	東ツエ	田	1 畝	99			洞
36	ツタイ	田	3 畝 26 歩	382.8			洞
37	フタイ	田	9 畝 20 歩	957	5 畝 3 歩 8 厘	504.9	洞
38	フタイ	田	6 畝 12 歩	633.6	4 畝 9 歩 5 厘	425.7	洞
39	ツエマタケ	畑	1 畝 6 歩	118.8			慈明寺
40	ツエマタケ	田	4 畝 16 歩	448.8			洞
41	川バタ	田	2 畝 14 歩	244.2			洞
42	川バタ	田	2 反 12 歩	2019.6			洞
43	カハバタ	畑	1 反 1 畝	1089			洞
44	南塔ノ垣内	畑	7 畝 24 歩	772.2			洞
45	南塔ノ垣内	畑	5 畝 6 歩	514.8			洞
46	南塔ノ垣内	畑	4 畝 23 歩	471.9			(無記)
47	(無記)	田	1 反 16 歩	1042.8			洞
48	南塔ノ垣内	田	1 反 17 歩	1046.1	2 畝 6 歩	217.8	大久保
49	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	(無記)	大久保



1 第1トレンチ 全景（北から）



2 第1トレンチ 断割（北東から）



1 第2トレンチ 全景（南から）



2 第2トレンチ 断割（東から）



1 第2トレンチ 断割（北東から）



2 第2トレンチ 西壁（東から）



1 第3トレンチ 全景（西から）



2 第3トレンチ 全景（東から）



1 第3トレンチ 西断割（南東から）



2 第3トレンチ 東断割（南東から）



1 第4トレンチ 全景（南から）



2 第4トレンチ 西壁（東から）



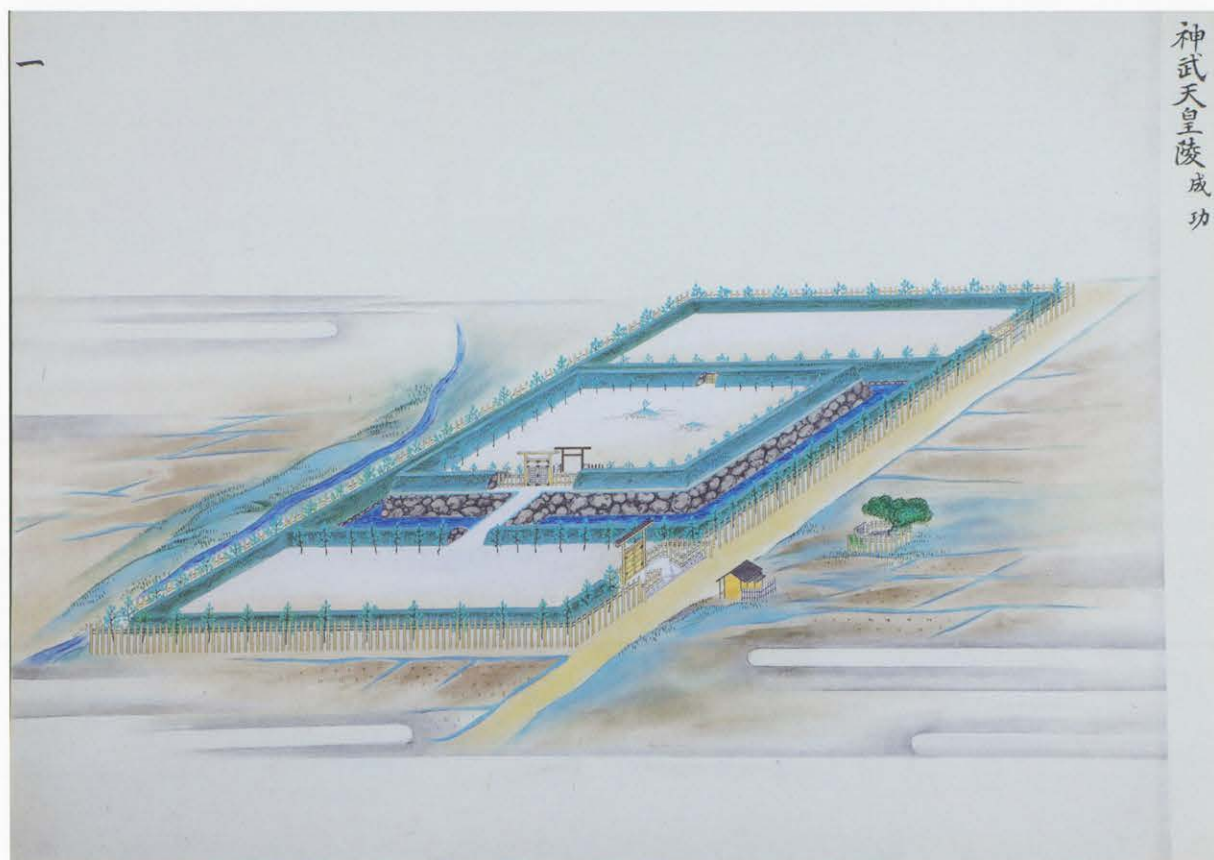
1 第5トレンチ 全景（南から）



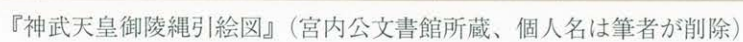
2 第5トレンチ 東壁（西から）

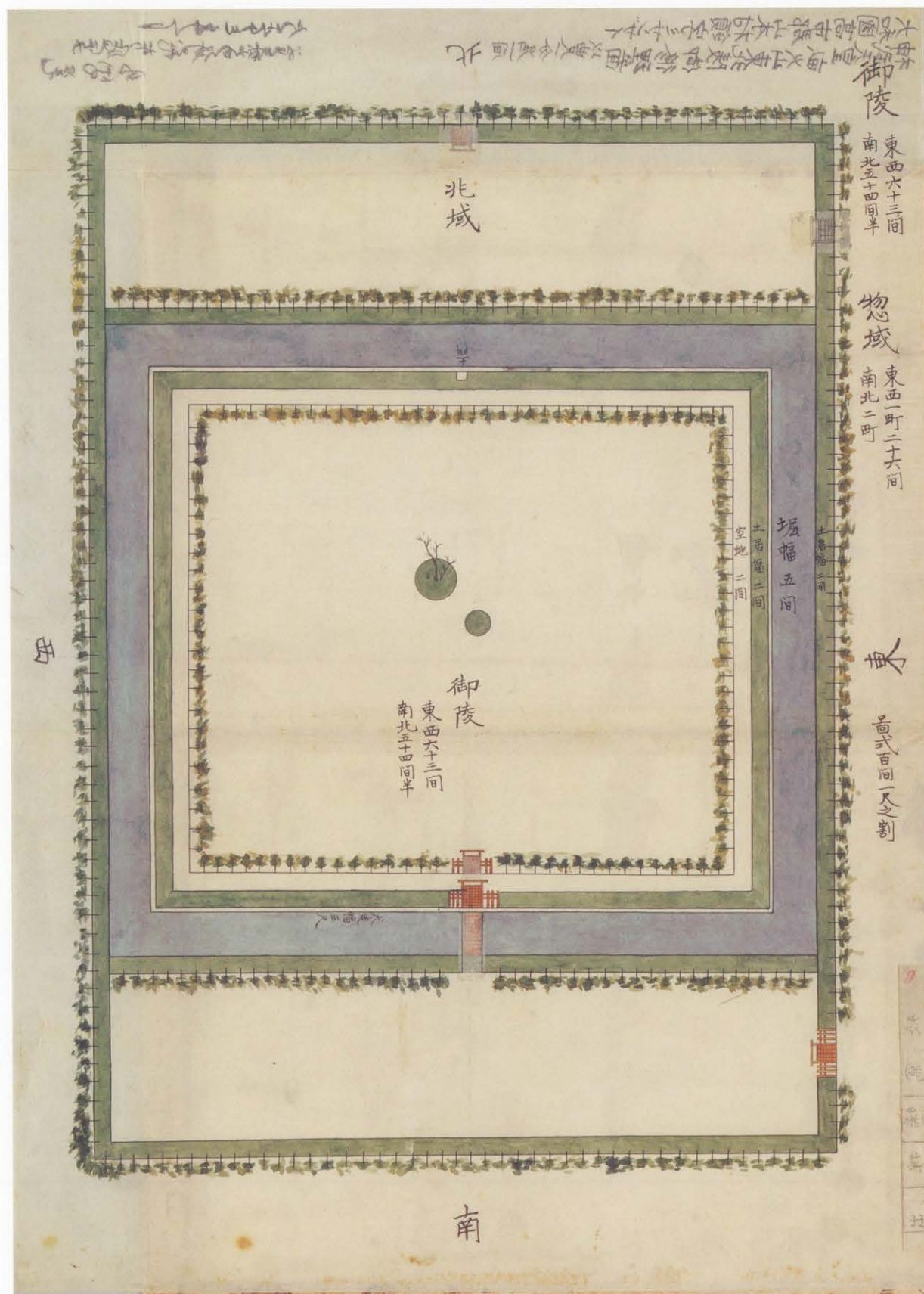


1 神武天皇陵 荒蕪 『文久山陵図』写（宮内公文書館所蔵）



2 神武天皇陵 成功 『文久山陵図』写（宮内公文書館所蔵）





『神武天皇畝火山東北陵修理図』（宮内公文書館所蔵）



1 縄文土器・弥生土器



2 土師器・須恵器

